



住み開きにより「対面」でのコミュニケーションを促す共用空間 ～パーソナルスペースを用いた集合住宅～

松野尾研究室 21UH017 小湊大地

01 研究背景と問題意識 Awareness of the problem

- 住環境において「対面」するコミュニケーションの場が制限

2019年の新型コロナウイルス感染症(COVID-19)のパンデミック以降、住環境において「対面」するコミュニケーションの場が制限されてきた。

世界全体で「ソーシャルディスタンス」という言葉が広まり、人と人の対人距離、物理的距離の確保が推奨されてきた。これらのことから、物理的距離が離れることで、結果的に心理的にも他者との距離がより感じられるようになったと考えられる。

- 地域住民のコミュニティの希薄化

コロナ禍以前から、地域住民のコミュニティの希薄化は問題視されていたが、コロナウイルスの感染終息後の現在にも心理的、物理的両方の距離が離れてしまうことが私たちの生活様式に根付き、コミュニケーションの機会の損失は以前より深刻化したのではないだろうかと考える。職場や学校では、「対面」のコミュニケーションは戻りつつあるが、住環境において「対面」でのコミュニケーションの機会は減少したままではないだろうか。

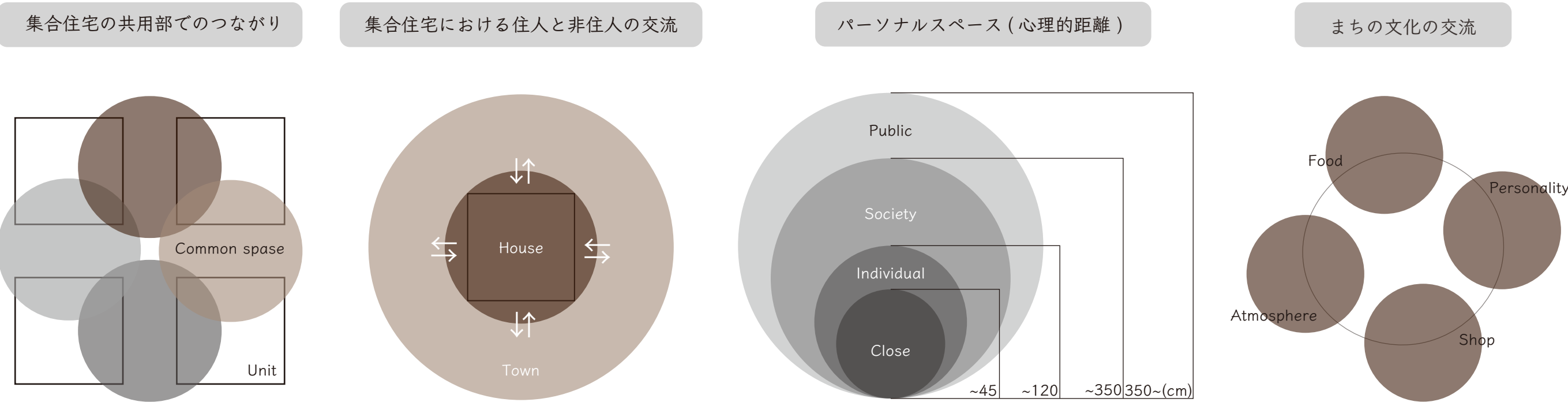
- 住環境における心理的要因と物理的要因の相互関係

ニッセイ基礎研究所がインターネットで行った「新型コロナによる暮らしの変化に関する調査」では、『コロナ禍において「孤独や孤立」によって不安を感じる人の割合が、男性では5人に1人、女性では4人に1人と不安を感じる人が増加傾向にあった。一方で、「コロナ禍における引きこもり生活がもたらす心理的影響」では、斎藤氏が、『「対面」に対するニーズは人それぞれであるが、「対面」によって活性化され、元気をもらえるとといった経験がある。「対面」は対人関係において強い相互関係を誘発する。』と述べている。

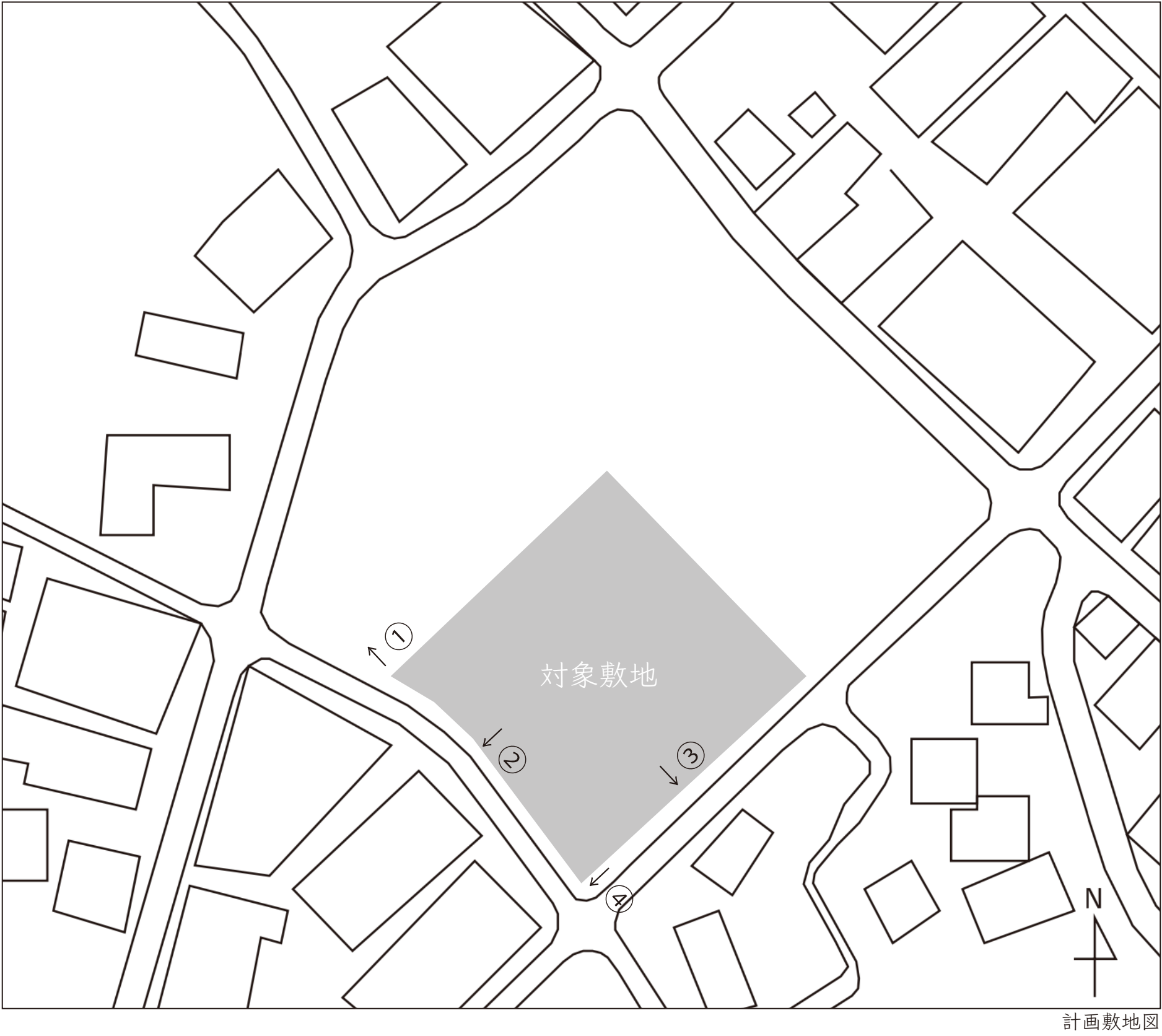
02 研究目的と設計主旨

本研究では、このような社会背景をもとに、住み開きにより集合住宅における住民同士、まちの人らの「対面」する機会を増やし、コミュニケーションの場を創出することを目的とする。集合住宅の共用空間において「対面」するきっかけとなる場の提案を行う。

事例研究を通して、「住み開き」をテーマとして設計を進めていくにあたり、「集合住宅の共用部でのつながり」「集合住宅における住人と非住人の交流」「パーソナルスペース（心理的距離）」「まちの文化の交流」に注目し、集合住宅の新しい在り方の提案を目的とする。

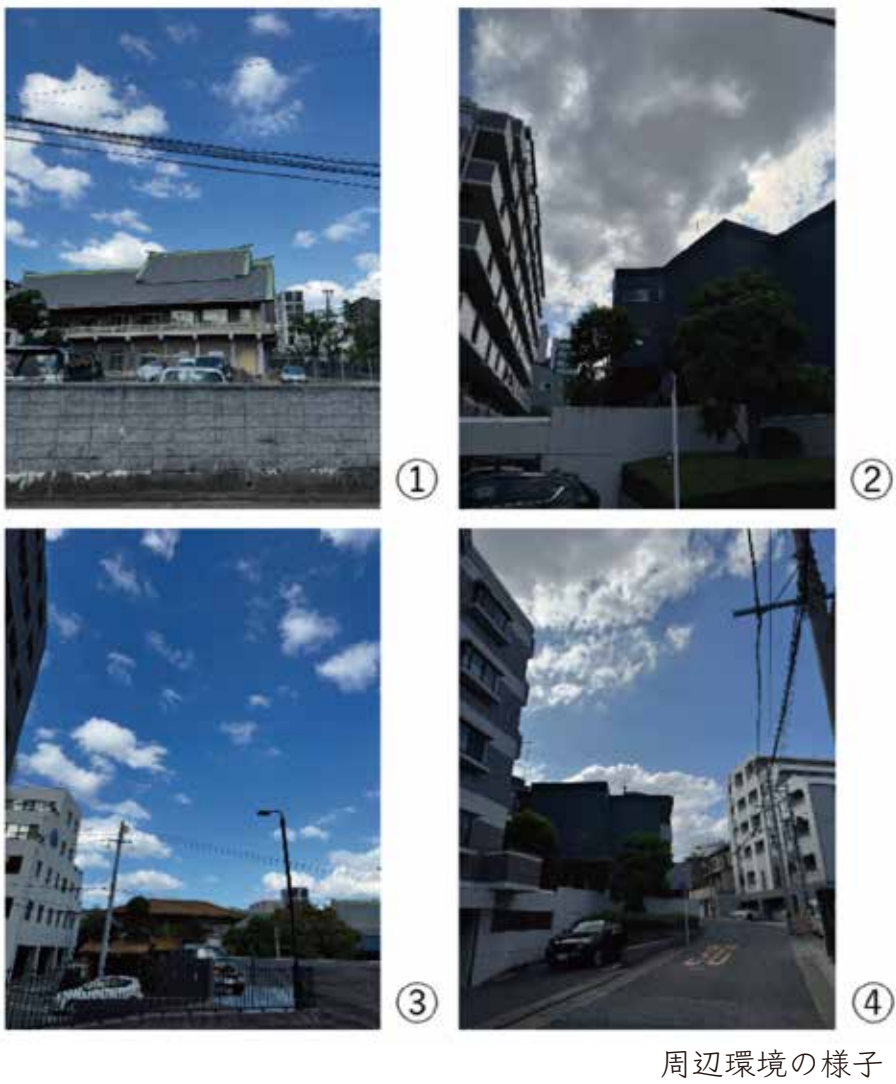


03 敷地概要と対象者



敷地概要
福岡県福岡市中央区平尾3丁目16

用途地域 第一種住居地域
建蔽率 60%
容積率 200%



周辺環境の様子

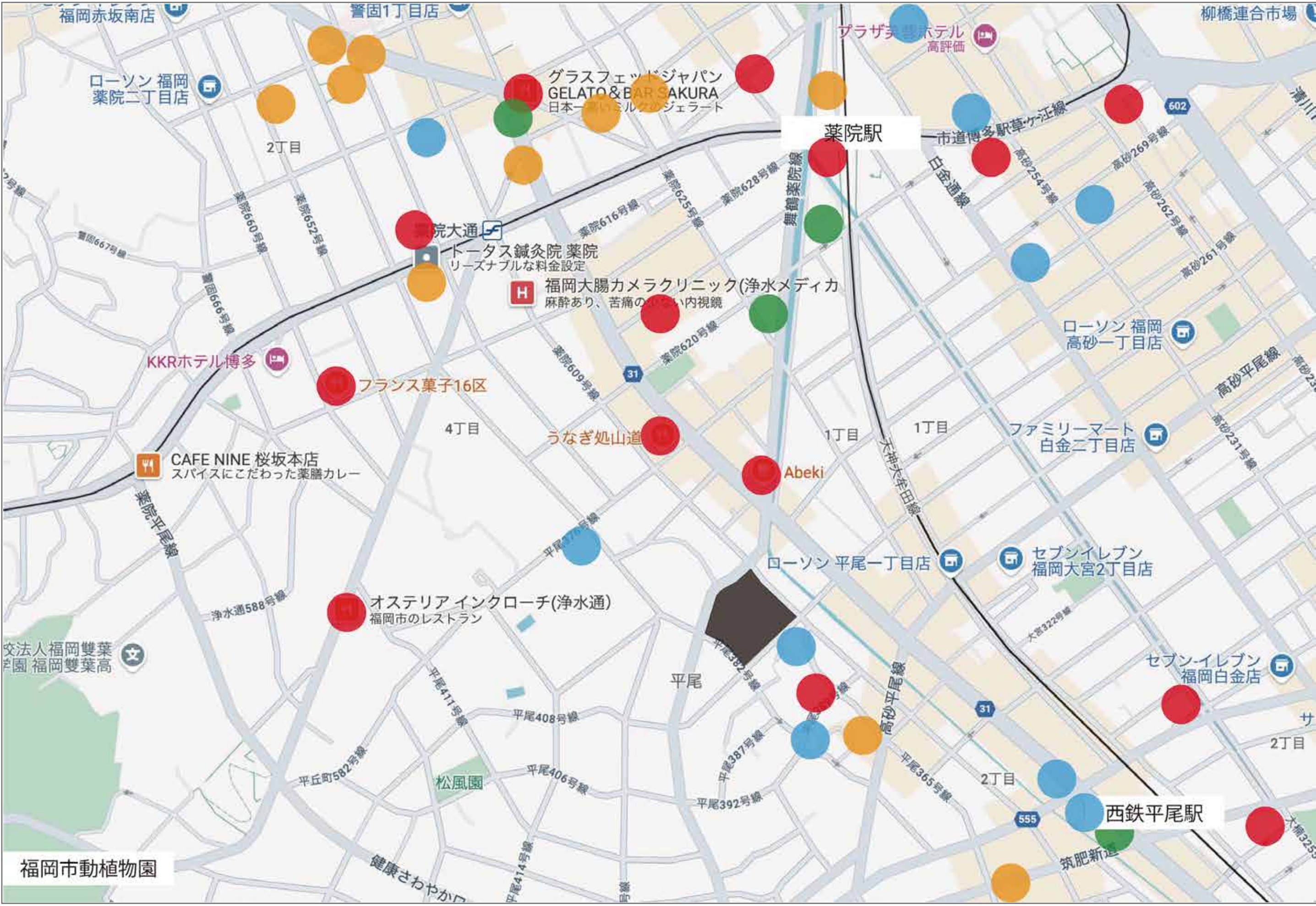
敷地は、福岡県福岡市中央区平尾3丁目16の一画を対象とする。中央区は、若年層、中年層と言われる(16歳から64歳)の人口割合が他の区に比べて高い。(右表)

本研究では、対象者を SOHO での仕事やこだわった趣味を持ち、アクティブに活動している若年層、中年層の人たちとする。「住み開き」では、自宅の空き部屋や事務所などを、ギャラリーやカフェ、屋内バルコニーなどとして、近隣に開放する事例が多く、対象とする人たちは、そうした住行為を受容できるとする。

(表) 令和2年の福岡市の3区分別人口割合

	総数	15歳未満	割合(%)	15～64歳	割合(%)	65歳以上	割合(%)
福岡市	1,612,392	205,089	12.7	1,054,071	65.3	353,232	21.9
東区	322,503	44,644	13.8	206,347	63.9	71,512	22.1
博多区	252,034	24,192	9.6	181,915	72.1	45,927	18.2
中央区	205,501	20,446	9.9	147,628	71.8	37,427	18.2
南区	265,583	36,109	13.6	167,911	63.2	61,563	23.1
城南区	132,864	16,709	12.5	83,649	62.9	32,506	24.4
早良区	221,328	32,652	14.7	135,648	61.2	53,026	23.9
西区	212,579	30,337	14.2	130,973	61.6	51,269	24.1

04 フィールドリサーチ



業院・平尾エリア店舗分布図 (●飲食店 ●カフェ ●雑貨屋 ●古着屋)

今回、計画する敷地は、大通りである高宮通りから少し入ったところに位置する。住宅街でありながら、周辺の建物は低層の住宅が立ち並ぶ。周辺の自動車や自転車の交通量が多いが、人通りは少ない印象であった。加えて、周辺道路の道幅は狭い印象であった。

現状、観光客や人通りの少ないと考える平尾のエリアに今回、計画する仕事や趣味にこだわりを持つ人が集まって住む集合住宅は、新たなパワースポットになり得ると考える。

筆者は、2024年8月1日から8月30日にフィールドリサーチを行った。対象とする敷地の周辺にある店舗の分布図を作成した。(上図) 飲食店が14件、カフェが10件、雑貨屋が11件、古着屋4件という結果だった。

加えて、今回、本研究に参考となる2024年8月10日に行われたまちのイベントに参加した。イベントに参加した筆者は、まちの実体に気づくことができた。平尾や業院では、カフェ店員や服店員が、自らの企画で頻繁にイベントを開催し、身内の人や友達、まちの人々など多くの人を集めている。筆者は、参加したイベントで主催者たちに聞き取り調査(住まいと仕事または活動している場所)を行った。結果として、「仕事や趣味の活動地が業院であっても、住まいが他のエリアである」という人がほとんどであるということがわかった。このことから、仕事や趣味を住まいと近くで行えるような空間を形成すれば、「住み開き」のライフスタイルを取り入れる人の居住が可能となるのではないかと考える。

訪れた店舗一覧

- R スリランカ (スパイスカレー)
- REC COFFEE 業院駅前店 (カフェ)
- SUP STAND FUKUOKA (カフェ&ギャラリー)
- 植物屋 (プラント)
- Nethnic vintage& select (古着屋)
- B・B・B POTTERS (雑貨屋)



写真 フィールドリサーチの様子

新建築 (Online) の新建築・住宅特集を用いて事例研究を行った。検索ワード「集合住宅・2000～2024 年・日本」(全 1212 件) から本研究のテーマである「住み開き」に着眼点を置き、その中から本研究につながるような 3 件の事例を分析した。



1. 鹿手袋の長屋 (藤野高志 / 生物建築舎)

「人と町を繋ぐ、きっかけとしての建築」
人の生活が建物の外観と混じり合い、その豊かさが町に広がり、町に取り込まれるように、「住戸の多様性」、「個人領域の明確化」「格子状の配置」の 3 つを意図して設計された。→各住戸の堺にセミパブリックゾーンがあり、個人空間、共用空間が入り混じっている。

リビング (Brown) ワークスペース (Green) プライベート (Gray)

参考文献：新建築 2014 年 8 月号 162P より



2. Dragon Court Village(稲垣淳哉ら / Eureka)

「地域・環境へと開かれた低密度な住宅群」
各世帯が 2 台の駐車スペースを持ち、隣地と余白を共有し、地域・環境へと開かれた住宅群を目指した。風が通り抜け日陰を生み、室単位ではなく群として快適な空間の秩序へと至るような建築である。→建物の余白を屋外と半屋外の住人同士のコミュニティの場としている。

参考文献：新建築 2014 年 8 月号 74P より



3. 西麻布の集合住宅 (SALHAUS)

「街と共用部と住戸をなめらかに繋げる」
集合住宅を、共用部と占有部 (住戸) の二項対立的な考え方によらず、各住戸にひとつプライベートテラス (P.T.) を設けることで居住者は、街→共用部→P.T.→土間→居室と段階的に個人の領域に至る。P.T. の使われ方はさまざまであり、共用部を行き来する時の空間体験と、外観の印象をかたちづくる。→玄関前に土間とプライベートテラスを設け、椅子やテーブルなどを置いて、交流の機会をつくっている。「住み開き」に最適であると考える。

リビング (Brown) 土間 (Green)

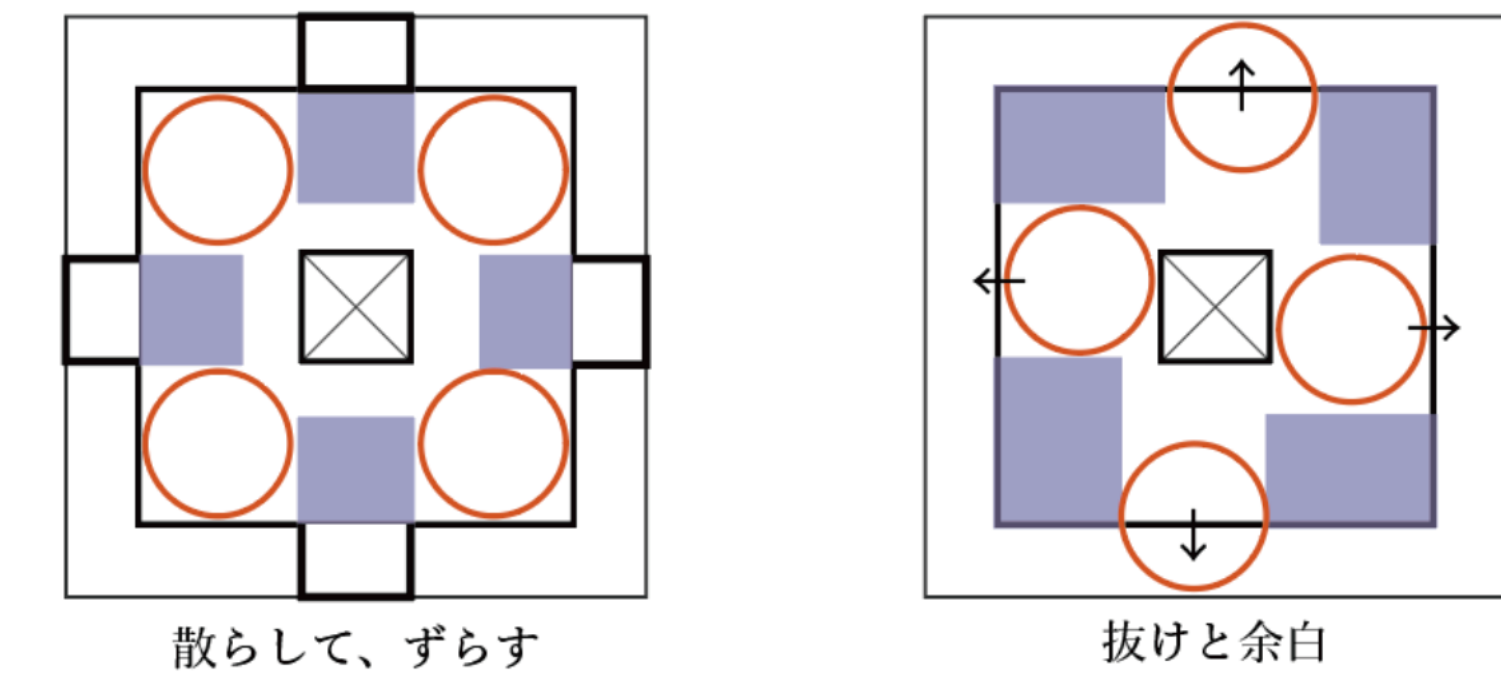
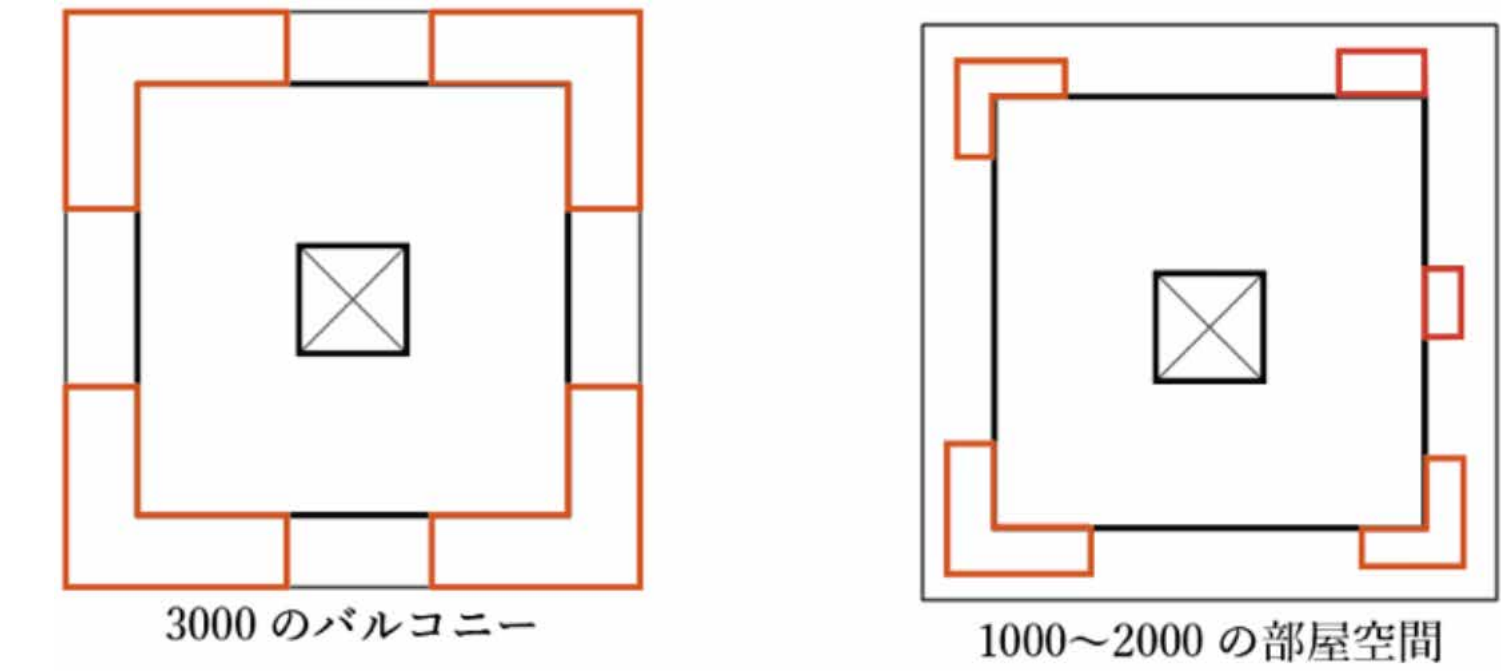
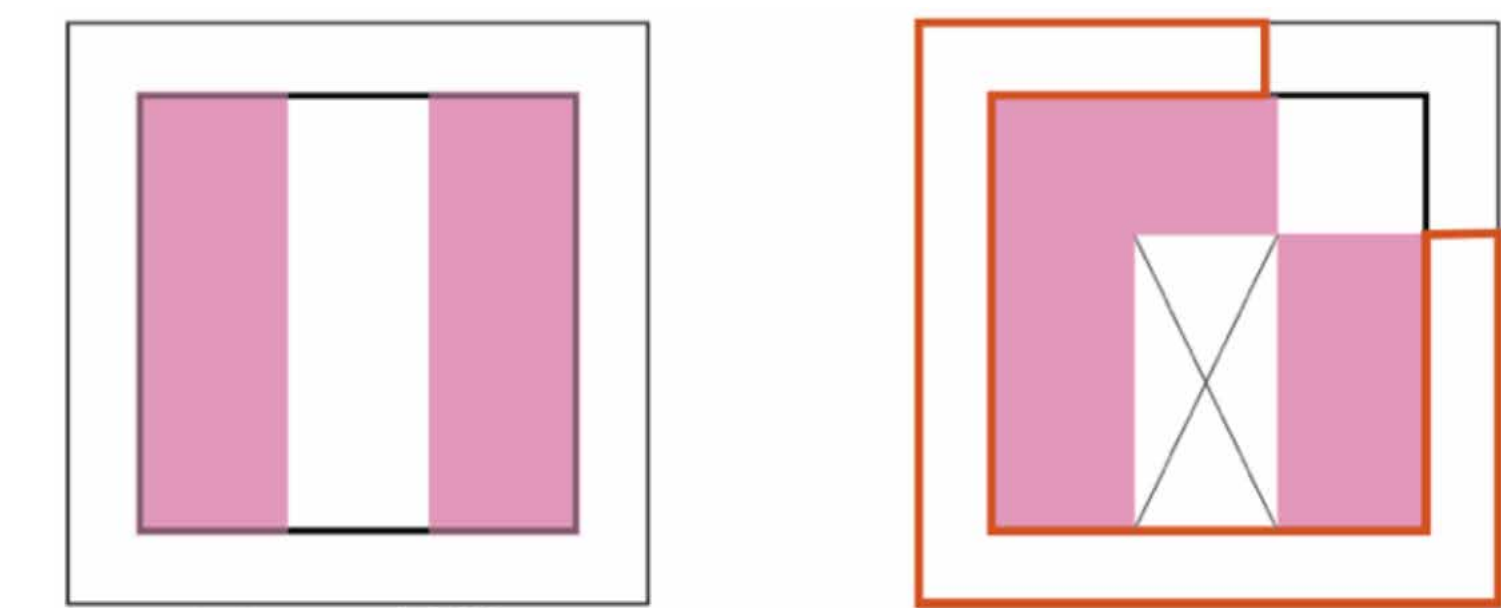
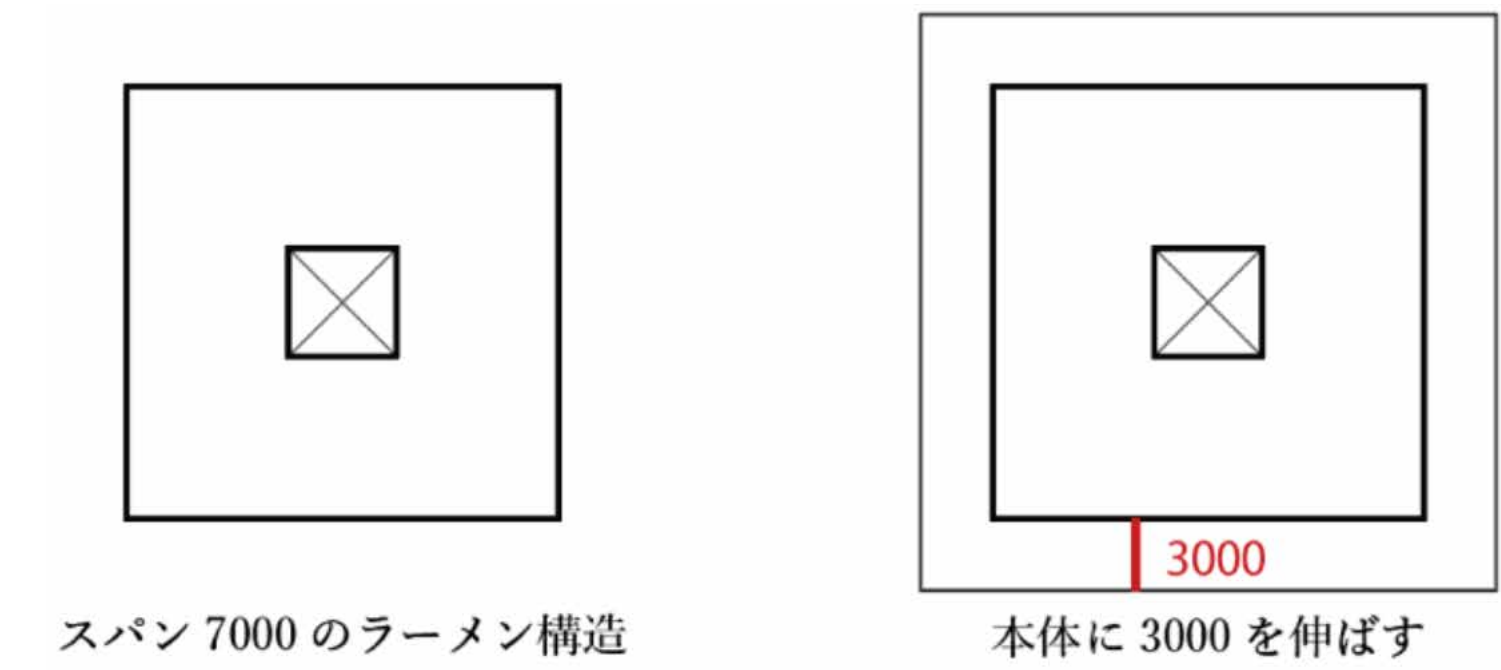
プライベートテラス (Yellow) プライベート (Gray)

参考文献：新建築 2014 年 8 月号 96P より



本研究では、SOHO での仕事やこだわった趣味を持ち、アクティブに活動している若年層、中年層の人たちを対象者に、住み開きにより、集合住宅における住民同士、まちの人らの「対面」する機会を増やし、コミュニケーションの場を創出することを目的とし、集合住宅の共用空間において、日常から住民同士が「対面」するきっかけとなる交流の場の提案を行う。

建物内にまちの人らも、ふらっと立ち寄れるように、一階部分は店舗 (カフェ、スパイスカレー、古着屋) 二階部分はギャラリースペースを計画し、住人のこだわった趣味をもつ人 (ペイントアーティスト、フォトアーティスト、植物屋、編物、音楽、コーヒー) が、まちの人に振る舞い、まちの人と集合住宅の住人たちが交流できるようにオープンな空間を形成する。三階部分以上は集合住宅の住戸とし、各階の共用部は、住人同士が集まり、お互いの仕事や趣味を共有しながら、交流する空間を形成する。また、住戸は、共用部ともつながりを持つよう、リビングやキッチン、作業部屋の配置を工夫し、「住み開き」により日常生活を共有するライフスタイルを形成する。コンセプト図をもとに住み開きにより「対面」でのコミュニケーションを促す商業空間を併用した集合住宅を計画する。



交流の場の構成

もととなる建物の構造は 7 0 0 0 mm スパンのラーメン構造を採用する。建物の中心部分は、吹き抜けにして、中廊下型の集合住宅を計画する。最大 3 0 0 0 mm のカンチレバーにより住人が交流する共用部をつき出す。

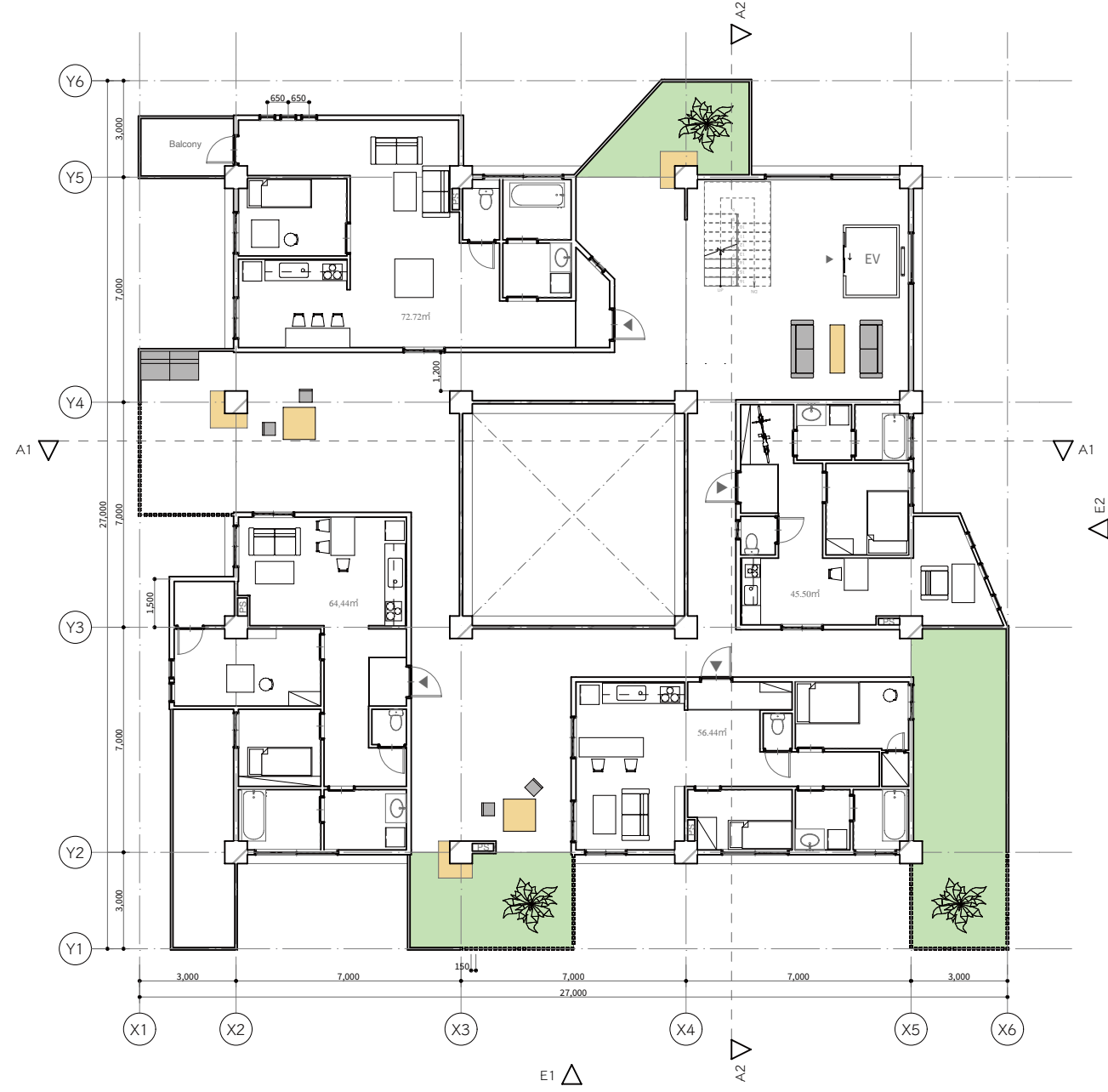
一階、二階は、住人以外のまちの人も立ち入ることのできる交流の場とする。まちの人と集合住宅の住人とのコミュニケーションの場となるように、一階には、カフェ、スパイスカレー、古着屋の店舗を計画し、二階には、コモンスペースとして、作品を展示するギャラリーと椅子や芝生に座ってくつろげる空間を計画する。また、外からも中の様子が見えるように、ガラス張りや格子を用い、人が簡易的に立ち寄れるように計画する。店舗型集合住宅を形成することで、住人とまちの人らが新たに交流することができると考える。

住戸の構成

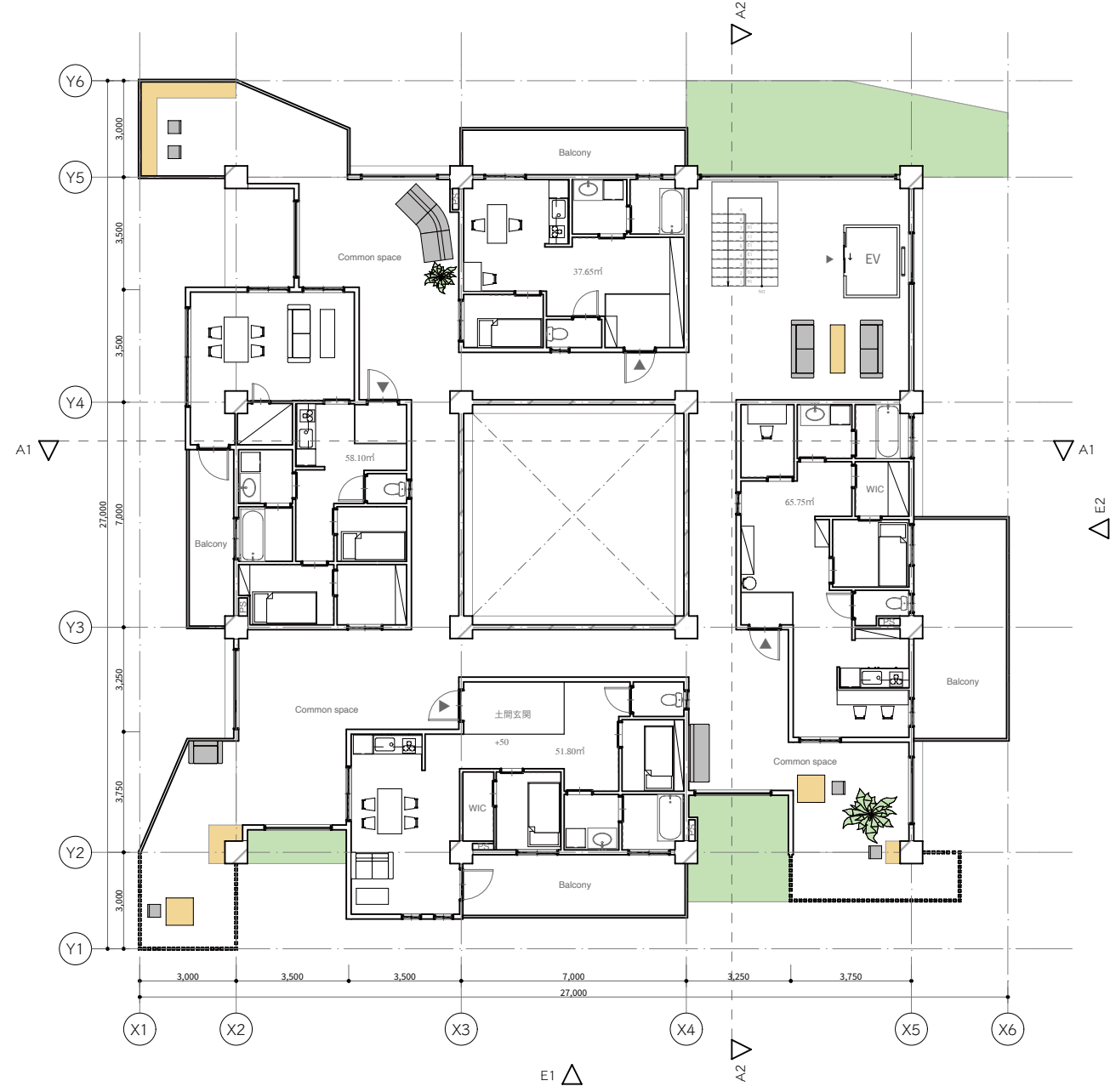
主に三階以上を集合住宅における住戸を配置する。住戸のバルコニーや部屋、共用部をカンチレバーによって複雑につき出す。平面的にも、断面的にも、ずれが生じ、住み開きによる住人同士の生活の一部やひと時を共有することができると考える。

また、外部からもバルコニーでの生活や、共用部での生活のワンシーンを可視化することができると考える。

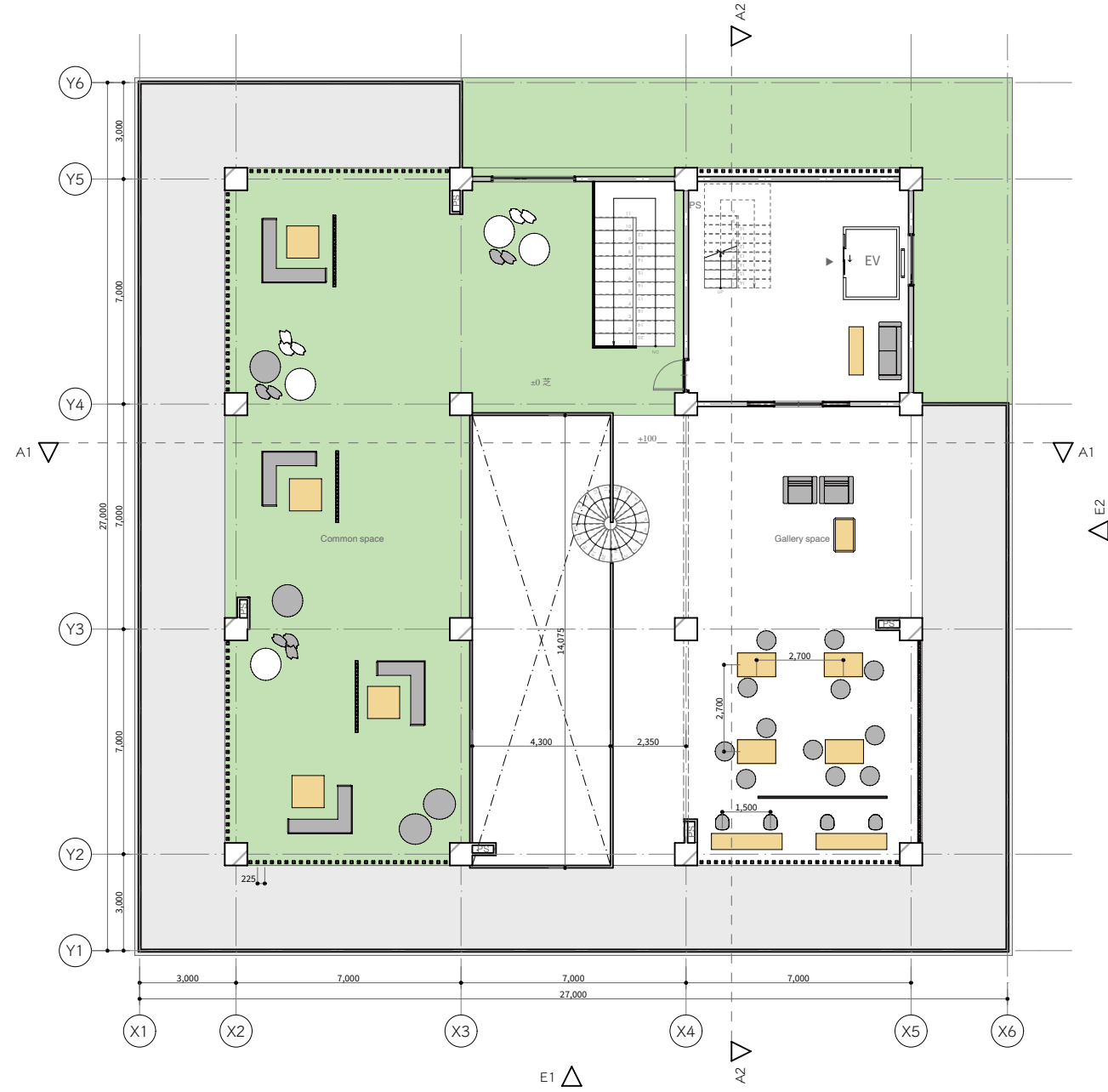
住戸や共用部にずれをもたらすことによって、その空間にあったさまざまな交流が生まれるのではないかと考える。
広い空間では、住人同士でコーヒーやお茶菓子を振る舞ったり、部屋の外に出て、編み物を一緒に行ったりとゆったりと時間を過ごす。一方で、狭い空間では、観葉植物を育てたり、自転車をメンテナンスしたり、椅子に座り読書をしたりと 1 人で趣味を楽しんで過ごす。
お互いのこだわりのある仕事や趣味を住まいのそばで共有することができると考える。



三階平面図 S=1/200 inA1



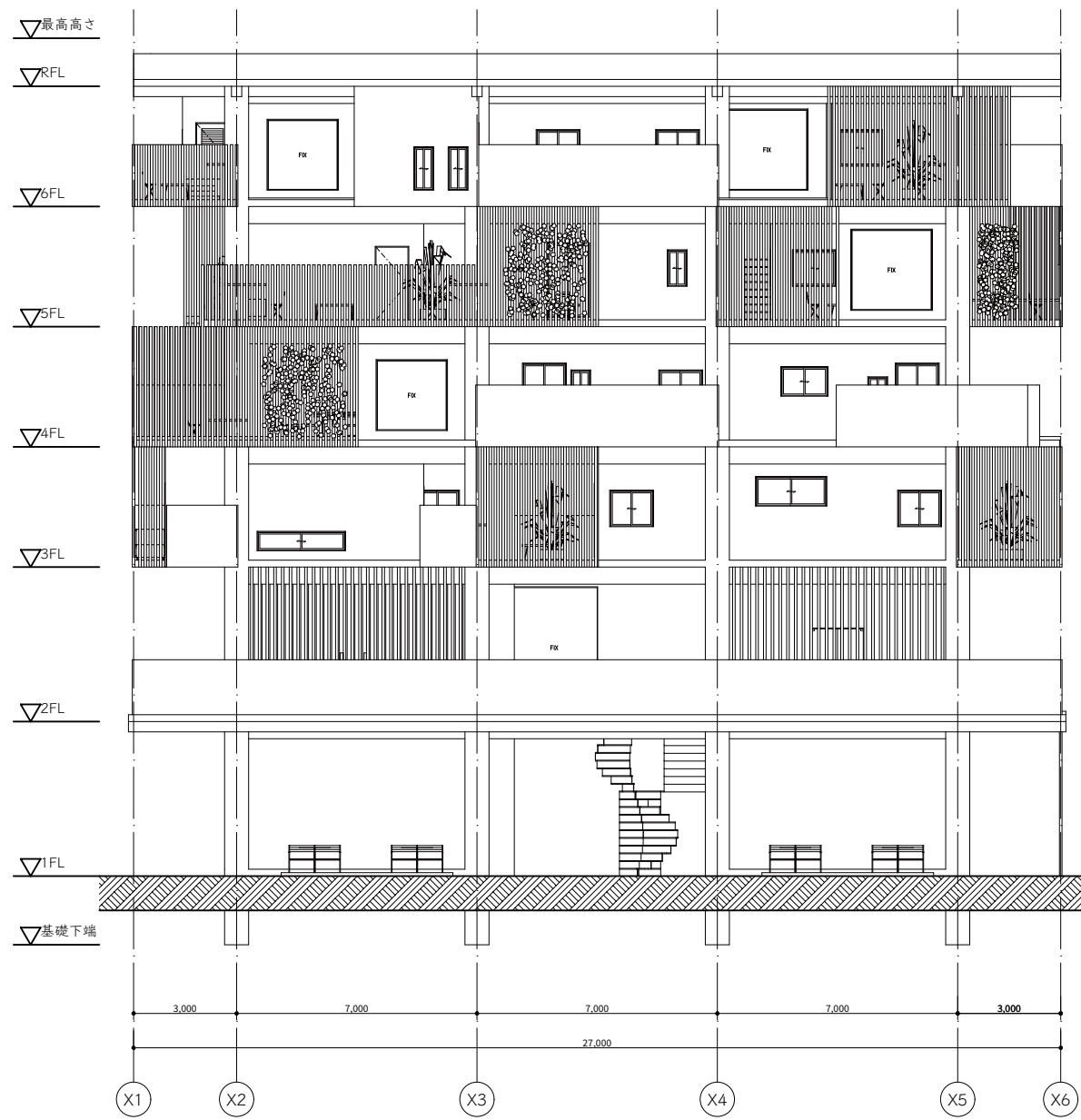
六階平面図 S=1/200 inA1



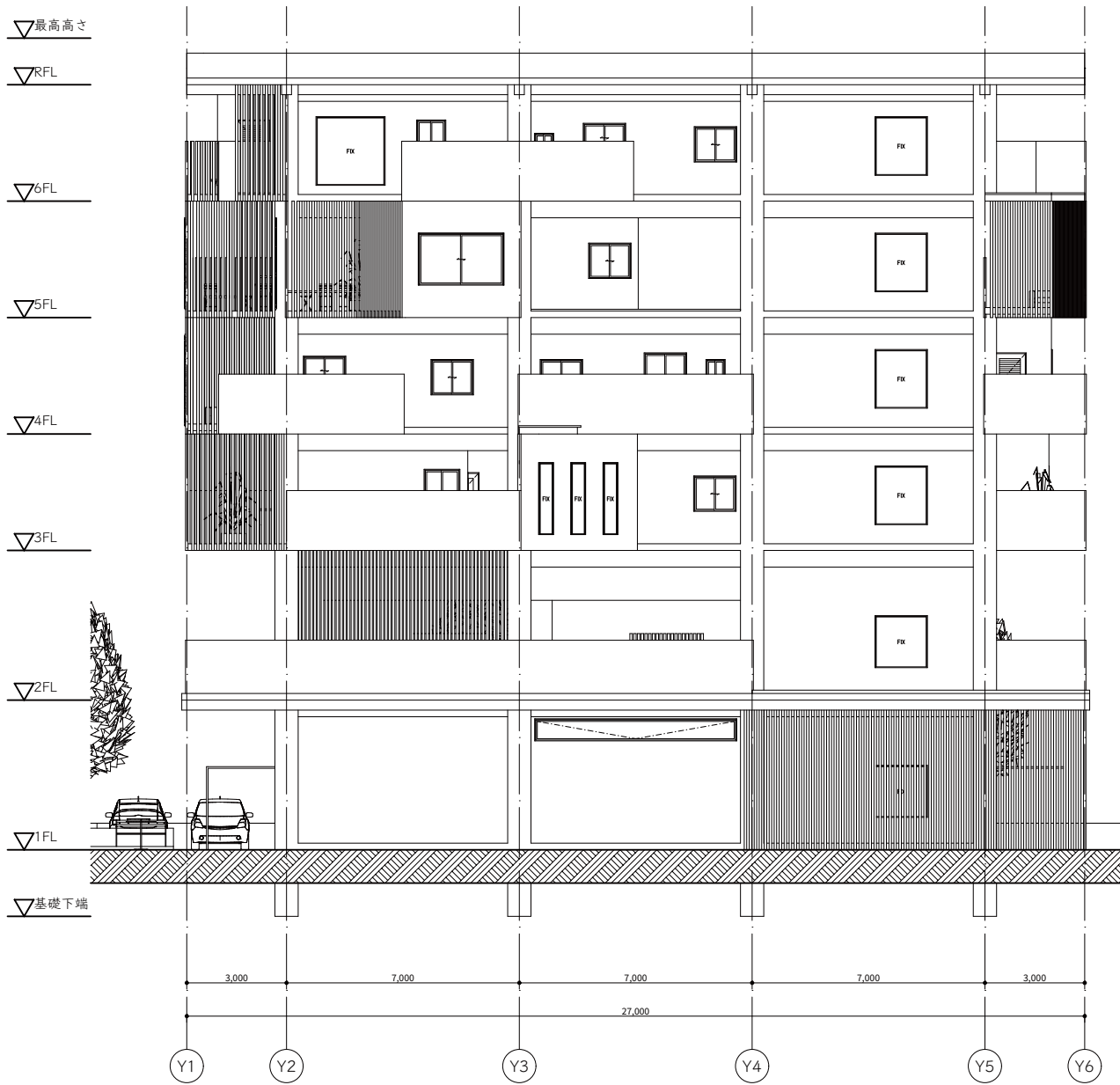
二階平面図 S=1/200 inA1



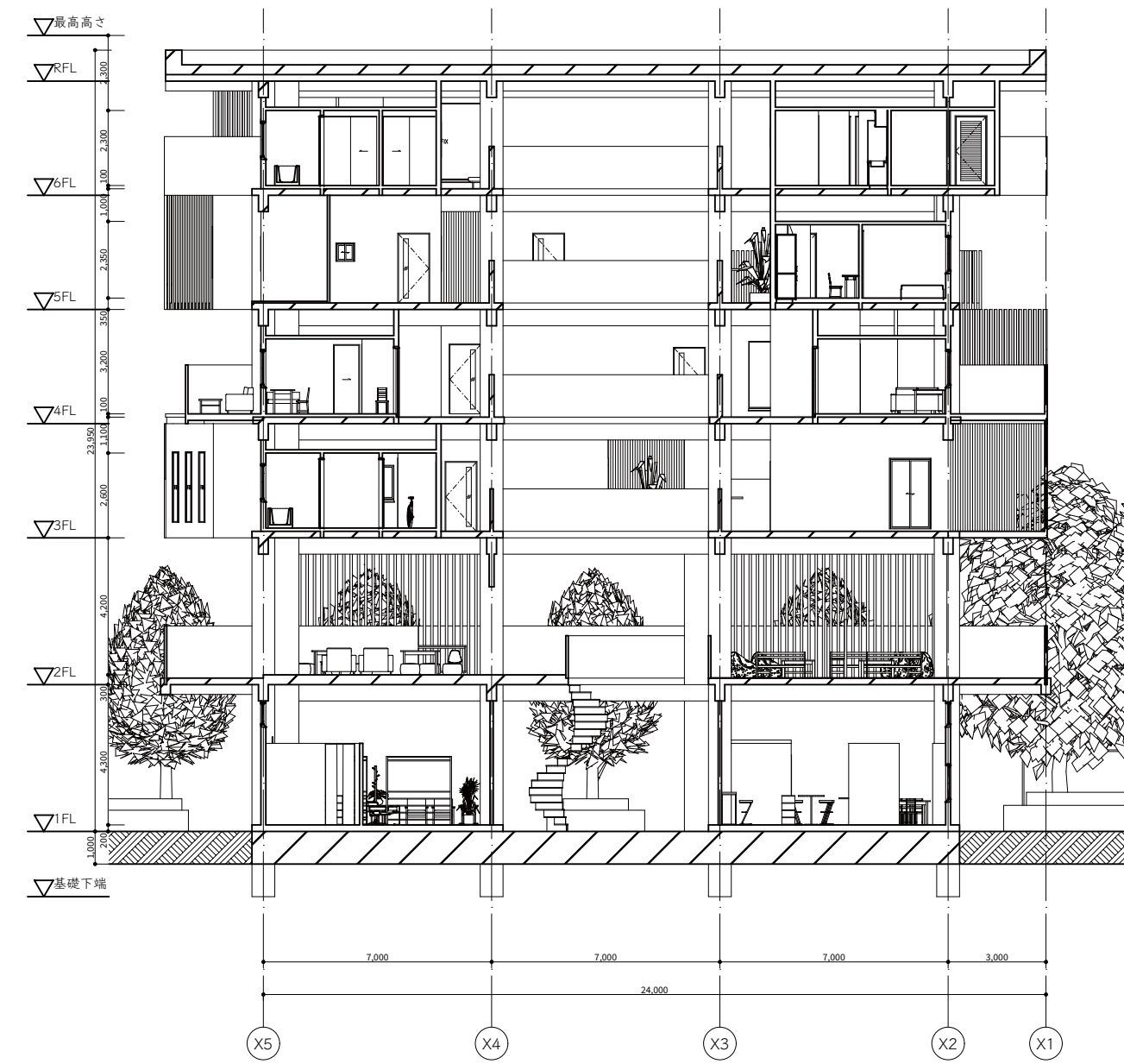
五階平面図 S=1/200 inA1



南側立面図 S=1/200 inA1



東側立面図 S=1/200 inA1

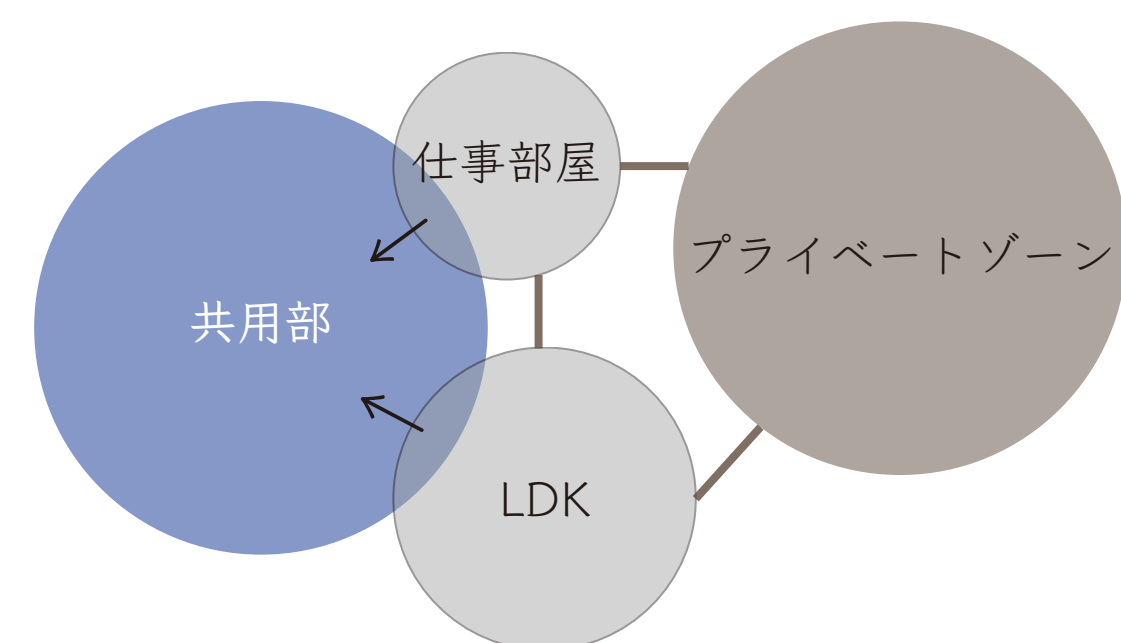
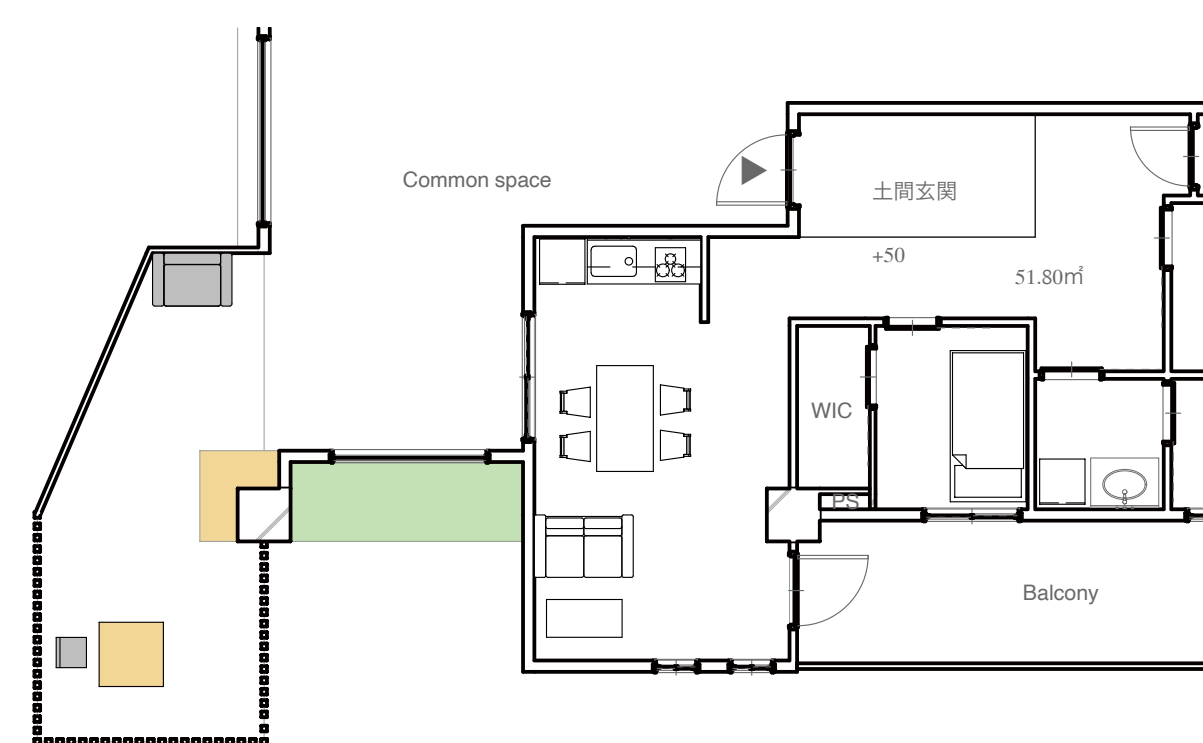


東西切断面 S=1/200 inA1



四階平面図 S=1/200 inA1

「住み開き」 / 共用部と住戸の関係



住み開きのイメージダイアグラム

共用部と住戸の関係は、空間配置に加えて、住む人の職業や趣味を想像しながら組み立てる。

例) 単身で暮らす画家が住む住まい

室内は、LDK とサニタリーだけの構成

↓

絵を描く作業は、共用部またはバルコニーで行う

共用部で作業する時は、住民を招いてライブペイントを行う

↓

バルコニーで作業する時は、1人で集中して絵を仕上げる

↓

描いた絵は、共用部で乾かしたり、二階のギャラリーに展示したりして絵を通して、まちの人たちとコミュニケーションをとる

共用部に対して「住み開く」ことで交流がうまれる



アーティストによるライブペイント



ひとりで読書

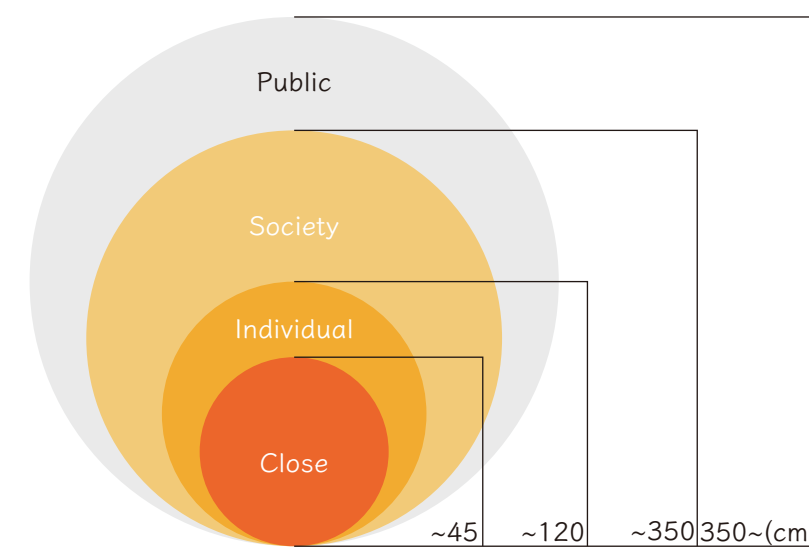
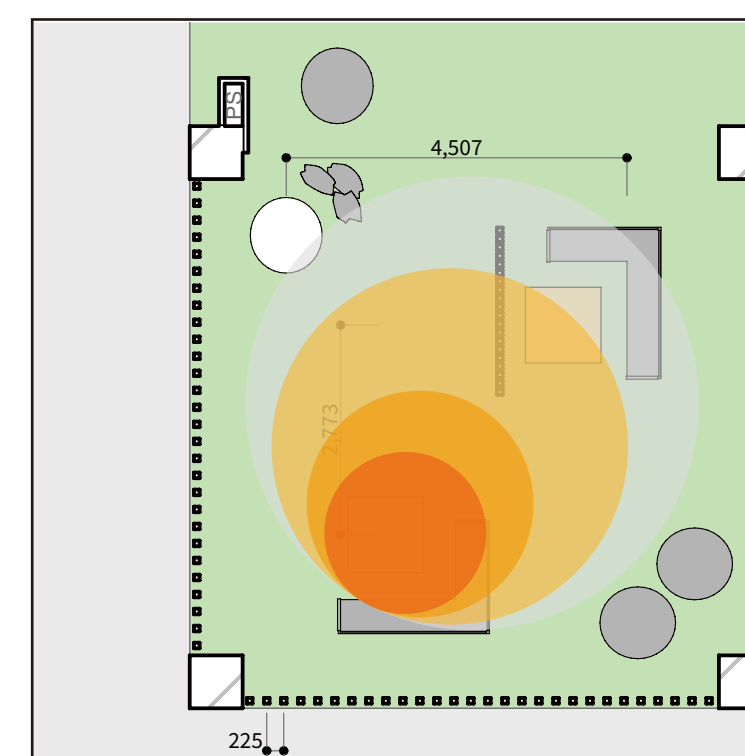


ドリップコーヒーを振る舞う



楽器の演奏・ミニ音楽会

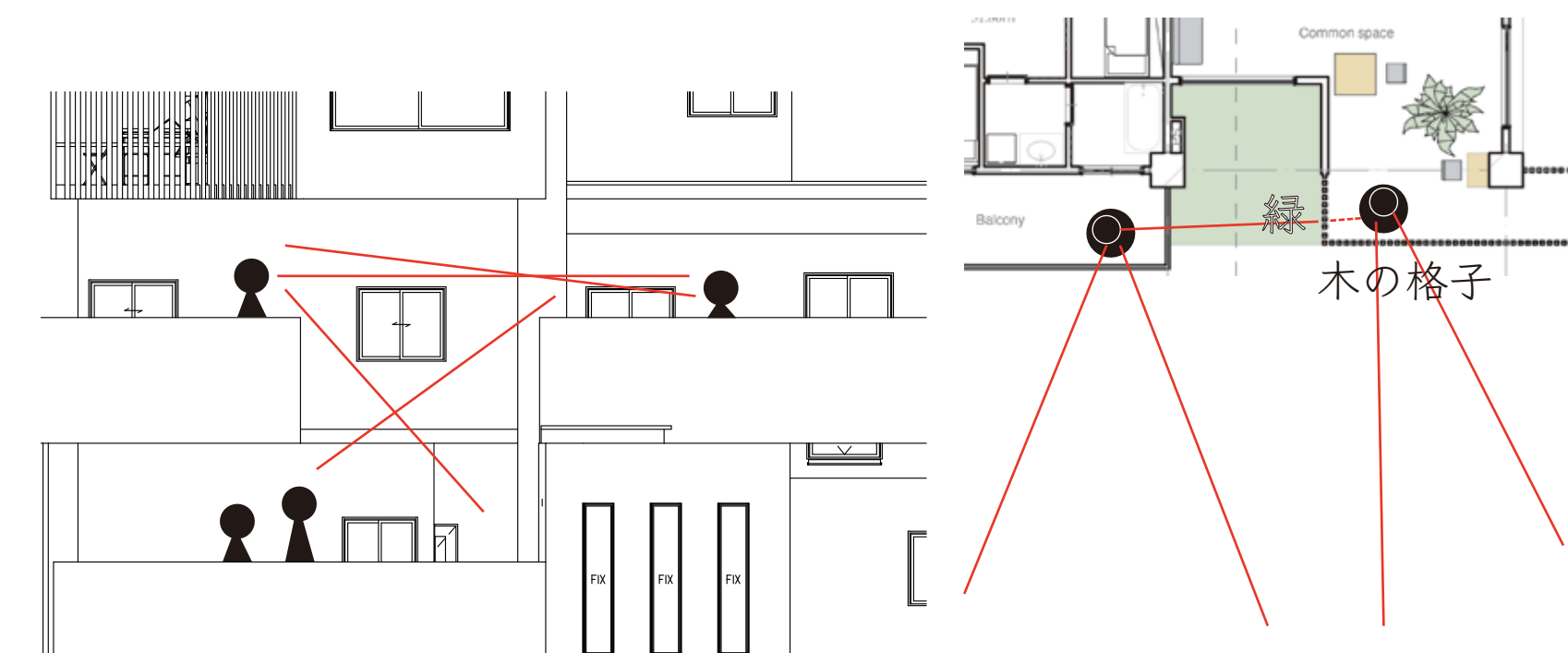
パーソナルスペース



パーソナルスペースの概念を意識して、家具配置を行う。

人の視線が気になる場所距離は、格子で間にフィルターをかける。

バルコニーの形状と人のつながり



木の格子



芝コモンスペースの交流



ギャラリーに集まる



バルコニーでの交流



一階店舗で増える交流



みんなで飲食を楽しむ

外観